

# 座間の神社

「座間の語り伝え（信仰編）」は昭和54年の語り伝え聴き取り調査をもとにしている。初めに、当時の調査団長の大沢清氏が冒頭で語っていることを以下に掲載する。

座間市内のお宮を尋ねてみると、その創建に伝説を伴うものがある。例えば、鈴鹿明神社・座間神社あるいは護王姫社で、それがどの程度の信憑性を持つかとなると、話は別である。既に郷土史研究家は、護王姫社は鈴鹿明神社と同様、素戔鳴命を祀った午王社ではないかと、疑問を投げかけている。

しかし、永い歲月代々語り伝え、言い伝えられ、地域の人々に信じられてきたことと、その伝承は大切にしたいと思う。

市内に祀られている神々は、その土地その村によって違いうけれど、他所からの招来の神である。何かの機縁で他国の有名な社に詣うで、その折、ご神体を分けて来て祀るとか、先祖がその故郷のお社のご神徳を偲んで、招来したものである。

なかには変わったものとして、新田宿の専念寺境内にある瘡守稻荷のように、当時江戸市中に流行した流行神を招じたものがあり、上栗原の北向庚申神社のように、信者の願いがかなえられたものが機縁となって、路傍の庚申塔が神社として定着したものもある。

このようにして祀られた神々は、それぞれの地域住民を悪疫や災害から守り、生業の繁栄をもたらすものとして、農民の信仰を受け、数百年に及ぶ氏神と氏子の関係は、信仰を媒体として続いたのである。

氏神と氏子の関係をさらに探究してみると、祀られた神々は庶民の生活に直接関連をもっている。新田宿の諏訪明神は農業の神であり、小池の弁天様、下栗原の龍蔵様は、名称は違っていても共に水神で、宇迦の神すなわち稲の守護神といわれている。この外、中河原・上宿・皆原にある大六天様は風神で、ひたすら、台風の災害から逃れようとした農民が、願いをこめて祀ったもので、星の谷の三峯神社は火伏せ盗難除けの神様で、火災や盗難等の災害から住民を守って下さるといふ。

また、神社で行なう神事もお社によって多少違うとは言え、五穀豊穡を祈る祈年祭を始め、例大祭・風祭等、農民の生業発展に関する行事が行われてきたのである。

こうして氏神は、家庭や地域の幸福と安全を守り、繁栄をもたらす神で、庶民から崇められた。下栗原の龍蔵社に見られる様に参道を穢しては恐れ多いと農道を別に作ったとか、河原宿の大神宮を寄せ宮しようとした時、氏子がソツと竹藪の中に隠して、自分達の氏神様の安泰を計った話は、氏神と氏子の関係を如実に示している。これもひとえに何百年という永い歴史に育まれた、信仰という太い絆で結ばれたからだと思う。

以下、個別の神社の概要について提示する。



## 鈴鹿明神社

お神輿の社として、市民から親しまれている 鈴鹿明神社は、昔、座間郷の総鎮守として、崇められたお社である。伝説によると欽明天皇の御代、今から千四百数十年前、三重県鈴鹿神社の神輿が海上を渡御されていた折、にわか嵐に遭い流されて当時、入海であったこの地に漂着されたのを里人が祀ったという。

この社には、参道を挟んで東西に池があったが、今はどちらも埋め立てられてその面影は残っていない。数年前、座間の旧家から古い日記が発見された。それによると、元文四年（1739）明神様の鳥居の再建のことが記され、入谷村・座間宿村双方の役員が協議して、鳥居の材料、山出しの人夫、大工、さらには完成祝の諸経費まで両者が折半で負担しあって完成したという。このような記録から永年にわたり座間・入谷の2ヶ村が、明神様のお祭りを合同行っていたことが伺える。なお、鈴鹿明神社と海老名市上郷にある有鹿神社とは深いかわりがある。その背景としては座間から海老名にかけての広大な水田を潤す用水の確保を祈願する神事であった。農民にとって耕作用水は生活が懸かっており、その確保のための水争いは随所にあったようである。（座間の語り伝え 信仰編 二版 昭和55年12月より）



## 諏訪明神

座間の諏訪神社は、座間市内に複数ある「諏訪神社」のいずれかを指す。一般的には、新田宿にある「諏訪明神（諏訪神社）」や、入谷にある「諏訪明神社」などが代表的である。どちらも信州の諏訪大社から御霊を分祀したとされ、地域の鎮守として崇敬されてきた。

主な諏訪神社

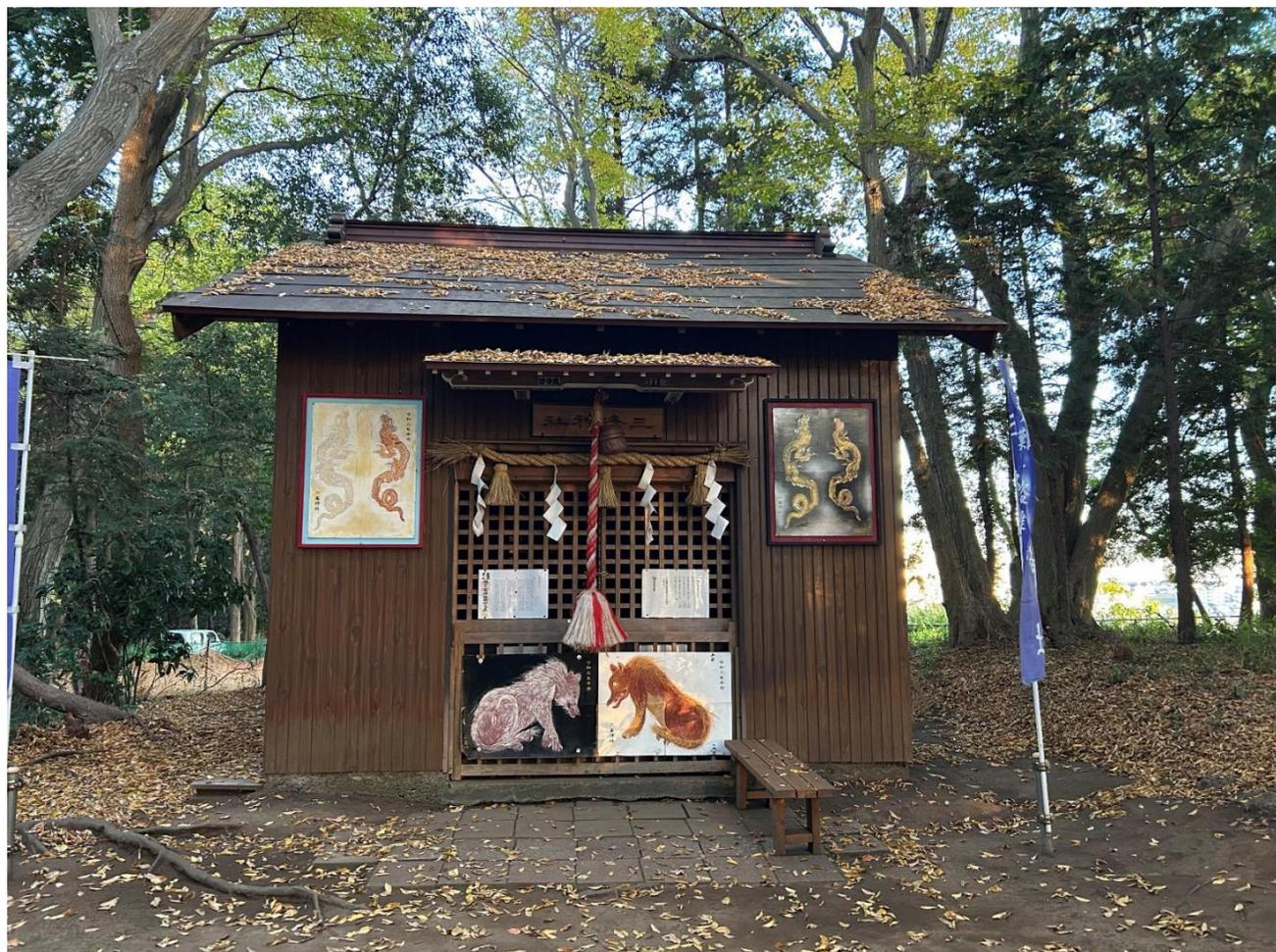
諏訪明神（新田宿）:鎮座地:座間市新田宿

創建:慶長7年（1602年）または慶長9年（1604年）に、諏訪大社の御霊を勧請したと伝えられている。ご利益:建御名方命を祭神とし、農業の神様などが祀られている。

写真は、諏訪明神社（入谷）:鎮座地:座間市入谷

創建は不明だが、鎌倉街道沿いにあり古くから鎮座していたとされている。

祭神:建御名方命。共通する特徴起源:どちらも長野県の諏訪大社から分霊されたという縁起を持つ。役割:地域の鎮守として古くから信仰を集めてきた。



## 三峰神社

御祭神 火産霊命(ほむすびのみこと)

星の谷・谷戸地区の氏神

火難盗難除の神として有名な火産霊命を祀る社で、地域の崇敬を受けている。いつごろ建てられたかは判然しない。明治四十三年九月、一旦鈴鹿明神社に寄せ宮されたが、また別れて現在に至っている。

例祭は毎年四月三日に行われ、明治末せ宮以前には、お祭の時奉納芝居が上演されたという。



## 金比羅社

御祭神 大物主大神  
皆原の氏神

創建は、江戸時代中期と言われるが判然しない。境内には北から秋葉社、中央に山王社、南に金比羅社が祀ってあったが、現在は、一つの社殿にこの三社が合社されている。

このあたりを山王峰というので、山王社が元であったようである。明治四十三年九月、鈴鹿明神社に合祀されたが、この合祀に関係した役員の家が次々と火災に遭い、これは金比羅様の祟りだということで、大正十年頃、もとのところに戻して祀ったという。例祭は十月十日に行われている。



## 護王姫社

御祭神 護王姫大明神

安産の神

星の谷にあって創建の年代は判然しない。伝説によると、昔、源義経の妻護王姫が、兄源頼朝に追われて奥州に逃れた夫義経の後を慕って、ここまで来たが難産のため亡くなった。その護王姫が、円教寺の開山日範上人の夢枕に立ち、「私は難産のため苦しんで死んだが、未だに成仏できないでいます。二、三日のうちにこの寺に徳の高い僧が来られるはずですので、その方に頼んで、私の墓の前で供養をして、私を成仏させて下さい。成仏ができた暁には、お産で苦しむことがないように産婦をお守りいたします。」と告げた。二、三日して日蓮上人が身延から東京池上の本門寺へ行く旅の途中、円教寺へ立寄られた。思い当ることのあった日範上人は日蓮上人にお願いして護王姫を厚く弔い、一宇の堂を建てて祀ったという。昔から、安産の神として崇められ、護符の外に絵馬も出していた。安産祈願にお参りした際、お社の絵馬をお借りして家に持帰り、絵馬を飾って安産を祈った。無事に出産した家庭では、御礼参りの時新らたに絵馬を買い求め、借りた絵馬に添えてお社に奉納したという。

十月十七日のお祭には、現在、安産の護符だけが頒布されている。境内にある相生いの大欒は、根囲りが六・八m、高さ約二十m、樹令は三百年を超える大木で、市の天然記念物に指定されている。



## 座間神社

御祭神 小雅命(日本武尊)

座間地区の氏神

伝説によると、欽明天皇の御代、今から千四百数十年の昔、この地方に悪疫が流行して村人が大変苦しんだ折、白衣の老人―飯綱権現の化身―が現われ、山すそから湧き出る清水を使うがよいとすすめた。人々はその老人のお告げに従い、こんこんと湧き出る霊水を汲んで飲料水とした。さしもの疫病も治まり、村民は救われたという。神徳に感激した人々は、この地に飯綱権現を祀ったのが、お社の起りといわれる。境内の南西の辺に、霊泉が湧き出ている「泉水」の聖域が保存されている。

この社は、昔、飯綱社と言われていたが、明治九年十一月、座間神社と改称された。御神木を「相和の鑑」といい、杉の古木で目通りの周囲が三・三m、途中から山桜が生えた大変珍しい御神木であったが、昭和四十七年の台風で倒れたので伐採された。高い石段を上った左手の小高い所に、明王山にあった明王社、富士山公園内にあった浅間社、座間キャンプ内にあった天神社・山王社、道祖神、境内にあった蚕神社、の六社の碑が並んでいる。これは座間地域内に祀られていた神々を、明治四十二年、座間神社に合祀した時、社名を永久に伝えるため建立したものと思われる。例祭は八月三十日に行われ、芸能公演の外に、元気な子ども囃子が奉納される。



## 大神宮

御祭神 天照大神  
河原宿の氏神

江戸の初期に田んぼをひらくため、砂利や玉石を積み上げて高い土手を造った。そこに村人が大神宮を勧請した。お宮の棟札から創建は慶長十九年と判明している。大神宮のある河原宿と四ツ谷の丁度中間にあった中橋付近を、鳥居場といった。大神宮の一之鳥居が建っていた所らしい。

地域の人が一生涯に一度の願いをこめて、お伊勢詣りに行く時はこの鳥居場に集り、見送りの家族もここまで来て道中の無事を祈って送った。社の伊勢神宮の神璽は、現在鈴鹿明神社が保管している。天の字を上書き周りに火炎のある印で、明神様のお札に押ししてある。

明治から大正にかけてお宮の合祀が行われた折、たまたま内務省の係官が、寄せ宮したかどうか河原宿へ調査に来るといふ。これを聞いた河原宿の氏子は、急いで大神宮を藪根の竹藪の中に隠した。大正五年か六年ごろという。

三百数十年にわたり地域の守り神として崇めてきた、氏神に対する庶民の心情が窺える話である。例祭は十月八日に行われている。



## 大六天

御祭神 大六天  
中河原の氏神

大六天は非常に数が少なく、この近辺では市内の上宿・皆原と厚木市の金田にある。大六天は風の神でインドの方から伝わったらしい。御神体は男神の立像で肩に大きな袋を担いでいるという。

文久二年に祀ったといわれ、ここに移り住んだ人々が、生活に直接大きな影響をもたらす台風を忌み、風神の御心を鎮めるために祀り、稲の豊作を祈願したのものと思われる。境内に稲荷社が合せ祀られている。

例祭は十月九日に行われる。



## 諏訪明神

御祭神 建御名方命  
新田宿の氏神

言い伝えによると、慶長九年神官新田氏の祖昌清という方が、信州からこの地に移り住み、故郷の諏訪大社のご神徳をしのび、御霊を分けて祀ったのがお社の起りという。境内に傘を拵げたような枝振りの、大きな赤松があった。お諏訪様の傘松と呼んで人々から親しまれていたが、惜しいことに昭和十二年ごろ枯れてしまった。境内には、蚕神社・天神社・秋葉社・稲荷社の小祠があり、鮭神社が社殿内に祀られている。古老から伝えられた話では、昔は相模川にも鮭が上ってきて、新田宿の東を流れていた小川に鮭の姿を見たという。何時の時代か判らないが、鮭の豊漁を祈って、鮭神社が生まれたものと思われる。この外、境内に市の重要文化財に指定された、修験道の開祖、役行者の記念碑とみられる、「神変大菩薩」の碑が建っている。例祭は十月七日に行われる。



## 日枝神社

御祭神 大山咋神

四ツ谷地区の氏神

昔、四ツ谷の鎮守は天神社で、ここに移り住んだ人達が、元亀二年に建てたお社とい  
い伝えられている。

はじめお宮の土地が一町歩余もあったが、永い歳月の間にいろいろ変遷があつて、次  
第に衰微していったという。大正のはじめごろまで境内には大きな樹木が生い茂り、人  
々は天神森と呼んで大変寂しい所であった。現在の天神森遊園地のある付近で、昔の面  
影は見られない。大正二年四月、県の指令に基づいて、天神社は日枝神社に遷され、合  
祀された。もともと日枝神社には、古くから山王大権現を祀ったお堂があつて、日吉大  
社または山王様と呼んでいた所である。天神社の合祀後、四ツ谷地区でお祭を取りやめ  
たことがあつた。ところが、百年近く火災に遭つたことのないこの地区で、大正五年か  
ら三回ほど続いて火災が起つた。「火柱が立ち、その中に梅鉢の紋がありありと見えた  
。」との噂話が、当時の人々の間に囁かれたという。現在、日枝神社の境内には、立派  
な天満宮の小祠が建てられている。

昭和九年、日枝神社の氏子の代表が、神田明神から御神体を頂いてきて、現在に及ん  
でいる。例祭は七月の最終土曜日、日曜日に行われる。



## 栗原神社

御祭神 豊受姫命・天御柱命・若比売命・道反三大神  
栗原地区の氏神

栗原神社は、明治六年栗原の各小字に祀れていた、王子・龍蔵・握財・絹張・若宮の五社を、栗原地区のほぼ中央に当る王子社に合祀したもので、栗原の総鎮守である。王子社の創建は明らかでないが、昔、村人がこの地に王子大権現を勧請したお社といわれている。社殿の右横手に杉の御神木の記念碑が建てられている。それによると樹令を全うした御神木は、県神社庁の認可を得て、和四十二年伐採された。目通りの周囲四m、全長二七m、偉大な御神木をしのんで永遠に記念するとある。樹令七百年を越したと思われる杉の大木が、亭々と聳え立っていたことを思うと、古くからこのお社は、この地の氏神として人々の心を支えてきたといえる。境内にあった白樫は、目通り周囲三・六m、樹高二〇mの大木で、推定樹令は五百年前後、市の天然記念物に指定されていたが、令和5年3月、枯死が確認されたことにより伐採された。

例祭は九月の第一土曜日と日曜に行われ、栗原地区の囃子連による祭太鼓の競演は、まことに勇壮であり壮観である。



## 龍蔵社

御祭神 龍蔵大神・天之御柱命・国之御柱命  
下栗原の氏神

八軒庭に伝わる三百五十年前の古地図の写しによると、すでに龍蔵様と標記しており、その場所は、巡礼坂を登った「いっぺい堂」の辺に記されている。その後、いつの時代かに中下の西高台に社を移し祀った。

明治六年、いったん栗原神社に寄せ宮したが、また別れてもとの所に戻した。小字の社といっても神楽殿を備え、お祭にはお神楽を奉納したという。土地の人々は社にお詣りする道を、肥料運びで穢しては誠に恐れ多いといって、参外に農道を作った。当時の人が、氏神様を如何に崇敬していたかを物語る話である。明治三十五年ごろ、この地に悪疫が発生した折、徳生大権現を祀った小祠のある現在地に移したといわれる。七月の第一土曜日が例祭とされている。



## 山王神社

蚕神社を合祀 御祭神 大山咋命  
芹沢の氏神

創建の年代は記録がないのでわからないが、戦国時代、甲州から移り住んだと伝えられる住民の先祖が、部落の守り神として祀った社である。近くに山王塚があり、境内には枝が地に垂れる程の松の大木があったと、伝え聞いたことがある。

明治の代になり栗原神社に寄せ宮したが、明治三十年ごろ、芹沢に疫病が流行したので旧の場所へ戻し祀ったという。現在、地藏尊・念仏供養塔が境内に安置されているが、共に第一水源の坂を登りつめた辻の、左手の小高い所に祀られていたものである。なお境内には、芹沢出身の戦没者の立派な慰霊碑が建てられている。四月中旬に例祭が行われる。



## 弁財天社

白髪社を合祀 御祭神 弁財天・白髪大明神  
小池の氏神

小池には、地名が示すように小さい池があり、その池が目久尻川の源である。その池から湧き出る清水は絶えることがなく、流域の人々の生活用水となり、農耕の用水となって、農民の生活を支えてきた。この恩恵に感謝した里人が、池の辺に小祠を建てて祀ったのが弁財天社である。また、養蚕の神といわれる白髪様を、合せ祀ったといわれている。三月三日を例祭とし、昔は、目久尻川の水の恵みに浴している寒川町から、はるばる代参一村の代表一が見え、神徳に感謝したという。



## 北向庚申神社

北向庚申神社は、元々は庚申塔からはじまった。最初は街道の北向き（鬼門）に向かって建てた厄払いの庚申塔を地元の人と街道を通る人の信仰も集めて絵馬が奉納された。昭和初期に賑わいが頂点にあったときにこの庚申塔が建てられた。なお、当神社に関連した案内板の記述を以下に掲げる。（平成 17 年座間市教育委員会が設置）

御祭神 猿田彦命・青面金剛・帝釈天

上栗原の守護神

甲州から上栗原に移り住んだ住民の先祖が、村はずれのこの辻に建てた庚申塔が御神体である。かつては路傍の庚申塔で、ひっそりと置かれていた時代があった。昭和のはじめ、眼病を患っていた皆原の沢田善太郎さんが、芝原の畑の行き帰りにこの庚申様に眼病平癒を祈願したところ、奇跡的に治ったのが契機となり、この庚申塔を信仰するものが次第に増えていった。

そして昭和十年、地域の人や一般信者の誠意が実って、現在の社殿が造営された。

ことに戦時中は京浜方面をはじめ、県下各地から靈験を信じてお詣りする者が多く、一家の息災や、出征兵士の武運と無事帰還を祈願し、社前は大変な賑いを呈した。戦後、参拝者は減ってはいるが、地域の人々の崇敬の念は厚く、例祭は春の庚申日に行われている。



## 相武台神社

御祭神 日本武尊

昭和七年十月、城條清五郎氏が栃木県の古峯神社の御神体を分けて頂いて建てたのが、このお社の起りで、それを近隣の人々が地域の氏神として祀るようになった。はじめ古峯神社といったが、後に、相武台神社と名称を改め、今日に至っている。市内では新しいお社で、四月に例祭が行われる。

# 北向庚申神社と庚申信仰<sup>所</sup>

在地 栗原中央一丁目35-15

祭神 猿田彦命・青面金剛・帝釈天

この神社のご神体は明和八年(1771)に上栗原地区の人々が住民と通行者の安全を願って、村はずれの北向きの辻に建立した庚申塔です。初代庚申塔に亀裂が生じたので慶応四年(1868)に新しく庚申塔が建立され、二基の庚申塔が北向きに並んで建てられた。

北は人々に災いをもたらす方角なので、ここに建てられた庚申塔は災いを防ぐ守り神として人々の信仰を集め、多くの安全祈願の絵馬が奉納された。この評判は近隣の町や村にも伝わり、昭和時代に入ると多くの参拝者が訪れ、近くには飲食店もできて大変にぎわった。

昭和十年(1935)には、地域の人々と住者の願いがかない、二基の庚申塔をご神体とした社殿が造られました。

## 庚申信仰

庚申信仰は、中国から伝えられた十干十二支に関わる信仰の一つで、平安時代に貴族たちに広まり、時代が下ると武士階級を経て一般庶民に伝わった。

この信仰は干支の組合せで六十日に一度の庚申の日、天の神様から派遣された「三戸の虫」が人の体の中にいて人が寝持まった夜に体内から技け出し天の神様に人々の行いを告げ、天の神様は悪い行いの人の家には罰を与え災いをもたらすというもので、これを防ぐために庚申の日には、仲間が集まって徹夜で過ごし虫の行動を見張った。これが庚申構で「かのえ構」とも呼ばれ、地域の相談や庚申塔を建てる話し合いなどをした。

現在、市内には三十二基の庚申塔がありますが信仰の様子を知ることはほとんどできない。その中で北向庚申神社は、地域の信者が奉賛会を結成し、恒例として庚申の日に祭神を祀る例祭を奉納し信者の安泰を祈念し、年によっては催しものが盛大に開かれた。

当社は、座間における庚申信仰の様子を伝える貴重な存在である。

平成十八年七月 座間市教育委員会

# 座間の神社

完